

「口から食べたい」意思尊重

摂食嚥下障害 訪問看護で実践指導

「口から食べたい」。脳卒中や神経難病などが原因で、口から食事を取ることが難しくなる「摂食嚥下障害」の患者の「食べたい」という希望を尊重し支援しようと、しなさき訪問看護ステーション（那覇市）と合同会社「Comer（コメル）」（豊見城市）が連携しながら現場で実践を重ねている。同ステーション看護師の屋比久絵美理さんは「『食べたい』と願う方は多い。必要な技術や知識を身につけながら関わっていききたい」と話す。

しなさきステーション（那覇）とコメル（豊見城）

「食べたい」

支援の正しい知識や適切な技術を持つ医療従事者は少ない現状がある。コメルの大城清貴代表は2012年に県内で



口ケアの方法を実践指導する大城清貴さん（提供）

初めて摂食嚥下障害看護認定を取得した看護師で、22年に「食べる」ことを支援する会社「コメル」を設立した。県内で看護師や介護士、栄養士などを対象にコンサルティングやセミナーを開催し、人材育成などに取り組んできた。

しなさき訪問看護ステーションとの連携は、同ステーションを利用して80代男性の「食べたい」という願いから始まった。

男性は進行性の神経難病で、入院中に誤嚥性肺炎を起こした。「口からの栄養摂取は難しい」と医師の診断を受け、胃に直接管を入れて流動食を流す胃瘻を造設。在宅での介護生活を続けていた。だが家族が食事を取

っている場面を見て「食べたい」と意思を示し始めたという。

「食べられるようになりたい」「食べさせてあげたい」。看護師の屋比久さんは男性や家族の痛切な思いをひしひしと感じたという。

同ステーションには摂食嚥下を専門に対応してきた看護師やリハビリ職がいなかったため、大城さんに指導を依頼。食支援に必要な基礎知識を学び、大城さんとの同行訪問で実践指導を受け、「食べる」という目標に向け動き始めた。

地道な訓練

口を開ける、息を吐く。「食べる」ことに向



男性がとろみ食を食べられるようになり、しなさき訪問看護ステーションのスタッフらとお祝いのパーティーを開いた様子（提供、画像を一部加工しています）

けたりハビリは地道だ。男性や家族は懸命に練習を重ね、訪問歯科など他職種との連携も図りながら訓練を続けた。

そして大城さんの指導を受け始めて約4カ月がたった頃、ついにとろみ食を食べられるまでになった。嚥下機能を評価する「兵頭スコア」で経口摂取がおおむね問題なくできる基準に達した時には、男性や家族、ステーションのスタッフらでパーティーを開いた。ノンアルコールビールにろみをつけたものを前に、男性は涙を見せたという。

屋比久さんは「食べられるようになって、本人も家族もとても喜んでくれているのが私たちもうれしい」と笑顔で語る。大城さんは「嚥下障害は『かめない』とか『飲み込めない』とかできないことばかり目につくかもしれないが、『本人がしたいことは何なのか』という視点も持つてほしい」と訴える。「食支援はいろいろな職種の連携が必要。輪を広げていき『口から食べる』を支援していききたい」と展望を語った。

コメルでは、食支援に関する相談などを受け付けている。問い合わせは「コメル 沖縄」で検索し、ホームページから。（嶋岡すみれ）

©琉球新報 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します